

赤ひげ診療譚

徒労に賭ける

山本周五郎

青空文庫

「病人たちの不平は知っている」新出にいできよじよう去定きよじようは歩きながら云つた、「病室が板敷で、莫塵もくじんの上に夜具をのべて寝ること、仕着しきせが同じで、帯をしめず、付紐つけひもを結ぶことなど、——これは病室だけではなく医員の部屋も同じことだが、病人たちは牢舎ろうしゃに入られたようだと云っているそうだ、病人ばかりではなく、医員の多くもそんなふうにいるらしいが、保本はどうだ、おまえどう思う」

「べつになんとも思いません」そう云ってから、登はいそいで付

け加えた、「却かえつて清潔でいいと思います」

「追従を云うな、おれは追従は嫌いだ」

登は黙った。

「われわれの中で、もつとも悪いのは畳だ、昔はあんな物は使わなかつた、水戸の光みつ圀くわんは生涯、その殿中に畳を敷かせなかつたという、それは古武士的な質素と剛健をとうとぶためだと伝えられるが、そうではない、事實はそういう気取りだったにしても、住居のしかたとしては極めて理にかなつていた、現に畳というものが一般に使われるようになった元げん禄ろく年代まで、二千余年にわたつて板敷の生活が続いていたことでもわかることだ」

「敷き畳という物はあつたのですね」

「それは貴人の調度であり、儀礼とか寝るときに使うだけで、板敷という基本に变りはなかったのだ」と去定は云った、「板敷がもし合理的でなかったとしたら、すでに敷き畳があったのだから、もつと早く畳というものが一般化されていたに相違ない」

道は坂にかかっていた。七月中旬の午後三時、曆の上では秋にはいったのだが、暑さは真夏よりもきびしかった。その日は微風もなく、空は悪意を示すかのように晴れていて、うしろから照りつける日光は、まるで手に触れることのできる固体のように、立体的な重さが感じられるようであった。登はもちろん、薬籠を背負った竹造も、着物の背中や二の腕あたりは汗ですっかり濡れているし、額から顔、衿首などにながれ出る汗を拭くのにいそがし

かったが、去定はまったく汗をかいていない。——登はこのことを夏にかかるころから気づいていた。脂肪質ではないが、去定は固太りに肥えている。両腕や広い肩には筋肉が瘤こぶをなしており、手も大きいし指も百姓のように太い、腰だけは若者のように細くひき緊っているが、ざっと見た眼には年老いた牝牛おうしのような感じを与える。——したがって、暑さも人一倍だろうと思うのだが、どんな日盛りの道でも平気で歩くし、決して汗というものをかかない。暑いなどと云わないことには驚かないが、汗を一滴もかかないということは、登にはわけがわからなかった。

——先生は暑くないのですか。

或るとき登はそう訊いてみた。去定は言下に、暑いさ、と答え

た。それがどうしたといわんばかりの返辞なので、登は汗のことまで訊く気にはならなかつたのである。

「この国の季候は湿気が強い、畳はその湿気と塵埃じんあいの溜り場だ」と去定は続けていった、「ためしにどこの家でもいい、そしていま煤掃すすはきを済ませたばかりの畳を叩いてみる、必ず塵埃が立つだろう、藁わら床と藪いで編んだこの敷物は、湿気と塵埃を吸い、それを貯めておくのにもっとも都合よくできている、もちろん、裕福な生活をしている者は、畳替えをしたりよく掃除させたりすることで、その不潔さをかなりな程度まで緩和できるが、貧しい者ではそんなわけにはいかない、保本もだいたい裏長屋などを見て来たから知っているだろうが、十年以上も敷きつ放しで、畳替えはし

ないし掃除も満足にはやらないから、しん芯の藁床は湿気でぼくぼくになり、擦り切れた畳表のあいだからはらわたのようにはみ出し
ている、そこは蚤のみと虱しらみの巢で、息をするたびに藁屑わらくずや塵埃を吸
いこむことになる、床は低く、その下の地面はいつも湿っていて
乾くひまがない、こんなところに寝起きをすれば、病気になる
らないのがふしぎなくらいだ」

これを養生所のように板敷にすれば、床下からの湿気も防げる
し、ござ藁はたやすく日光や風に当てることができる。これだけを
比較してみただけでも、どっちが合理的かということは明瞭では
ないか、と去定は云った。ちようど坂を登りきつて、本郷一丁目
の通りを右へ折れるところだった。登は去定の説明を聞きながら、

その理論の当否よりも、そういうところに眼をつけ、それを是と信じ、他の反対や不平に頓とんじやく着やくせず、すぐに実行する彼の情熱と勇氣に感嘆した。

——先生のような人こそ、養生所という特殊な施設にはうつつけの人なんだな。

こう思いながら、登は手拭で汗を拭いた。そのときひよつと、向うから来る一人の若者が眼についた。洗いざらしの単衣ひとえに三尺をしめ、藁草履をはき、片方の裾まくを捲まくつて、ひよろひよると来たが、すれちがいさまにどんと去定に突き当った。うしろにいた登の眼にも、明らかにわざと突き当ったということはわかった。不意をつかれて、去定はちよつとよろめき、すると若者が喚いた。

「やい老いぼれ、どういうつもりだ」

去定は相手を見、すぐに目礼して云った、「これはどうも、失礼した」

「失礼したあ」と若者は裾を捲っていた手で、こんどは片袖かたを捲りあげた、「やい、この広い往来で人に突き当って、失礼したで済むと思うのかよウ」

登はわれ知らず前へ出ようとした。しかし去定はそれを制止し、こんどは丁寧に頭をさげて云った、「見るとおりの年寄りで、考えごとをしていたために失礼をした、まことに申訳ないが勘弁してもらいたい」

「ちえッ」若者は眼を三角にして、去定を見あげ見おろし、だが、

それ以上云いがかりをつける隙がないとみたのだろう、脇のほうへ唾を吐いて云った、「ちえツ、縁起くそでもねえ、感情悪くしちゃうじゃねえか、気をつけやがれ」

半丁あまり歩いてから、登がいまいましそうに云った。

「ならず者ですね、ひどいやつだ、私はわざと突き当るのを見ていましたよ」

「そうしたかったんだろう」と去定はあつさり云った、「人間はときどきあんなことをやってみたいような気持になるものだ、若いうちにはな、——おれにも覚えがあるよ」

私は殴りつけてやろうかと思いましたが、登はそう云おうとしたが、口には出さず、拳こぶしを握ったまま黙って歩いていた。

二

日光門もんぜき跡の下屋敷のあるみくみ町に、小さな娼家のかたまつた一画がある。岡場所といわれるもので、棟割り長屋が並んでおり、一軒に女が二人ときめられていた。むろんそれは表向きのこととで、停止されたかと思うと、いつか許可になったり、つねに取締りの寛厳が繰り返されるから、娼家の軒数も女たちの数も一定してはいなかった。

去定は十日に一度くらいの割で、その娼家街へ外診にいき、強制的に女たちを診察し治療してやっていた。それは二年まえから

のことだそうで、森半太夫の話によると、一昨年の秋に、三人の娼婦が養生所へ救いを求めて来た。三人とも病毒に冒されているし、極度の栄養不足のため、殆んど餓鬼のようになっていた。去定は応急の手当をしておいて、彼女たちの雇い主を呼びだしたが、そんな女は知らないといって出て来なかった。そこで町方の役人に同行を頼み、みくみ町へでかけていつてみた。

——この世に悪人はない、この世界に悪人という者はいない。養生所へ帰って来た去定は、独りでしきりにそう呟いていたそうである。それは「悪人がいない」ことを認めたのではなく、悪人などいる筈がない、ということを自分に云い聞かせているような調子だった、と森半太夫は語った。救いを求めて来た三人のう

ち、一人は死に二人は半年ばかり療養したうえ、ほぼ健康をとり戻し、一人は水戸在の実家へ帰ったが、残った一人は逃亡してしまつた。

——親きようだいの身寄りもないというので、新出先生がこの賄所で手伝いでもしていると云われた。

けれども女は逃亡し、どこへいったかいまだに不明だということであつた。

これらのことは半太夫から聞いたし、養生所の病室にはいまでも二人、去定が引取つて来て療養している女がいた。登はその二人の治療には助手を勤めているが、外診でみくみ町へいったことはなかつた。——そしてその日、本郷の通りを湯島天神のほうへ

曲つたとき、彼はようやく去定のいく先に見当がついた。

「保本は、——」門跡下屋敷の見えるところまで来たとき、去定は足を緩めながら登に問いかけた、くるわ「廓とか岡場所などへいったことがあるか」

登はちよつと口ごもつた、「はあ、長崎にいたとき、三度ばかり」

「医者としてか、客としてか」

登は汗を拭いた、「学友にさそわれましたので、遊びにいったのですが、むろん」と彼は力をこめていった、「女には触れませんでした」

「ほう」と去定が云つた。

「私には江戸に約束した娘がいたのです」登はむきになって云つた、「その娘は私の留守ちゆうに他の男と、——いや、その娘は約束をやぶりましたが、私は待っていてくれるものと信じていたものですから、さそわれて遊里へはいつても、女に触れる気にはならなかつたのです」

去定は暫く歩いてから云つた、「悪いことを訊いたようだな、いまの質問は取消しにしよう、忘れてくれ」

登はまた汗を拭いた。

みくみ町のその一画には、低い黒板塀くろいたべいが廻してあり、入口の門の脇わきには火の番小屋があつた。黒板塀はすっかり古びて、ぜんとたいに傾かしがっているし、板の剥はがれたところもあつた。火の番小

屋は油障子があいており、中に男が三人ばかりいるのが見えた。

二人は肌脱ぎ、他の一人は裸であつたが、通り過ぎる去定を認めると、一人がなにか囁き^{ささや}、三人が一斉に、するどい眼つきで去定を睨み^{にら}、そして登を睨んだ。

「こんな季節に」と登が訊いた、「ここでは火の番が昼から詰めているのですか」

「あれは表向きだ」と去定が答えた、「ここでも火の番の役は犬がする、あの男たちはここの用心棒だ」

登にはその意味がわからなかつた。

「ここの客は武家の小者や折助などが多い」と去定が説明した、「中には武家の威をかりて、たちの悪いことをする者もあるが、

そんなときにはあの男たちが出て片をつけるし、また、女たちが逃げるのを防ぐ役目もする、つまりこの一画の娼家に雇われているのだが、——その関係はなかなか複雑だから一口には云えな
い、まあ、そのうちにわかるだろうが、——かれらがなにを云つても、決して相手になつてはいけない、ということ覚えておく
がいい」

「なにか云うようなことがあるのですか」

「ここではまだない」と去定は云つた、「たぶんそんなことはないだろうが、用心のために云っておくのだ」

「わかりました」と登は答えた。

去定は十七軒の娼家を訪ね、八人の女たちを診察した。その中

には手伝いだという、十三歳の少女も一人いた。女主人は「親類から預かっている手伝いだ」と云い、少女自身は年を十五歳だと云っていたが、胸や腰のまだ平べったく細いからだ軀つきや、や痩せた子供っぽい顔などは、どうしても十三歳より上とはみえなかつた。去定はまえから彼女に眼をつけていたらしく、むりやりに診察したあと、女主人をきびしく叱りつけた。

「こんな子供に客を取らせるやつがあるか、おれが届け出たら、おまえは臭いめしを食わなければならぬぞ」

「なにをおっ仰しやるんです、とんでもない」女主人は躍起になって否定した、「これはあたしの親類の子です、いくらこんなしょうばいをしていたって、親類から預かった子を客に出すなんて、あ

たしやそんな女じゃありません」

「これは瘡毒そうどくだ」去定は少女の口尻にある腫物はれものを指さした、

「おれはまえから見ていたんだ、からだにもこれができている、これは病毒持ちの客に接しなければできない病気だ」

「あたしは知りません」と云つて、女主人は少女のほうを見た、
「それとも、——とよちゃん、おまえあたしに隠れて悪いことをしたんじゃないかい」

少女は無表情に黙っていた。

「とよちゃん、返辞をしないの」

「よせ」と去定は女主人に云つた、「こんな猿芝居はたくさんだ、それよりこの子を親許おやもとへ帰すがいい、親はどこにいるんだ」

「それがよくわからないんですよ」

去定は黙っていた。

「おと年の暮までは本所の業なりひら平にいたんです」と女主人は云った、「舟八百屋をやつてたんですけれど、子だくさんでくらしに困つて世帯じまいをしたときにこの子を預けたんですが、そのままどこへいったか、いまだに行方知れずなんです」

去定はおとよに訊いた、「正直に云つてごらん、おまえのうちはどこだ」

「知りません」と少女はかぶりを振つた、「かあさんの」と云いかけてすぐに云い直した、「おばさんの云うとおりもとは業平にあつたんですけれど」

「嘘を云つてはだめだ」と去定は遮った、「私が力になつてやるから本当のことを云つてごらん」

決して心配はない、誰に遠慮することもない、私が付いていてやるから、と去定は云つたが、おとよは女主人と同じことしか云わなかつたし、年も十五だと云い張つた。そこで去定は、そういう事情なら養生所へ引取ると云いだした。女主人はどうぞと答えた。厄介者がいなくなるのは有難いくらいです、どうか伴つれていつて下さい。女主人がそう云っていると、おとよが急に泣きだしながら、あたしはいやです、と云つて肩を左右に振つた。

「あたいこのうちがいい」とおとよは子供がだだをこねるように叫んだ、「あたいどこへもいかない、このうちにいるんだ、

伴れてつちやいやだ」

それは本心のようであつた。女主人を恐れるためではなく、本当にこの家にいたいという感じが、その声にも、涙のこぼれ落ちる眼つきにも、よくあらわれていた。

「よく聞け」と去定はなだめるように云つた、「おまえは悪い病気にかかっている、このままこんなところにいたら、その病気のために片輪か気違いになつてしまふぞ」

「いやだ、いやだ」とおとよは泣きながら叫んだ、「あたいこのうちにいる、あたいを伴れてつちやいやだ、いやだ、いやだ」

女主人は平然と、きせるで^{たばこ}莨をふかしていた。隣りの部屋には女が二人いたが、これも息をころしているようすで、こそつとも物音がしなかった。だが、おとよの泣き叫ぶのを聞きつけたらしく、戸口の外で「なんだなんだ」という声がし、二人の男が^{あら}暴あらしく土間へはいつて来た。

「なんだ^{ねえ}姐さん」と男の一人が云った、「どうしたんだ、なにかあつたのか」

二人はどちらも若い、おそらく二十一か二くらいであろう、はけ先を曲げた流行の^{まげ}鬘に結い、しやれた浴衣に平ぐけをしめて、新らしい雪駄をはいていた。

「なんでもないので、騒がないでちょうだい」と女主人はきせるを置きながら云った、「養生所の先生がこの子が病気だからって、伴れてって治してやろうと仰しやるのに、この子がいやがって泣いてるだけなんですよ」

「泣くほどこいやがる者を伴れていこうというのかい」と若者の一人が云った、「病気を治すんなら、なにも養生所でなくつたっていいじゃねえか、この土地にはこの土地の医者もいることだしよ、なあ鉄」

「おうよ」と伴れの若者がしやがれた声で云った、「なにも養生所の医者ばかりが医者じゃあねえ、養生所の医者だからどんな業病でも治せるってわけのもんじゃねえだろう、そんならなにも世

の中に死ぬ人間なんかありやしねえ、病氣は病氣、医者は医者、死ぬ人間は死ぬ人間、なにもよけえな者がでしゃばるこたあねえんだ」

「あたはいやだ、いやだ」とおとよは身もだえをしながら泣き叫んだ、「どこへいくのもいやだ、あたこのうちにいるんだ」

「竹造」と去定が云った、「薬籠やくろうをよこせ」

竹造は上りがまち框のところ、二人の若者を睨んでいた。いまもとびかかりそうな顔で、拳を握っていたが、去定に呼ばれてはつとし、薬籠を登のほうへ押しやった。

「安心しなおとよちゃん」と初めの若者が云っていた、「おれたちが付いているからな、誰にだって指一本差させやしねえ、こつ

ちは命を投げだしてるんだから」

「おうよ」とその伴れも云った、「このしまのためにやあこちとらあ命と五臓を張ってるんだ、なにもだてにこのしまに住んでるんじやねえんだから」

去定は女主人に薬を渡していた。貝入りの膏薬こうやくと煎薬せんじぐすりとで、その用いかたを入念に教え、膏薬のほうは自分でおとよに貼つてみせた。おとよはぴたつと泣きやんだ。いままで泣き叫んでいたのが嘘のように、泣きじやくりさえ残らなかつた。

「はつきり云つておくが」と去定は女主人に云った、「今後は決して客を取らすな、もし客を取らせるようなことがあると届け出るぞ、わかつたな」

「わたしは大丈夫ですがね」女主人はきせるを取りあげながら云った、「一日十二刻ときこの子にくつついてゐるわけにはいきませんから、この子はませてるし、あんなことは障子の蔭で立つたままでもできるこつてすからね」

「そんな理屈がとおると思うのか」

「こんな子でも人間ですよ、まさか金鎖かなぐさりで繋つないどくわけにも

いかないでしょ」そして彼女は二人の若者たちに云つた、「もういいよ、鉄さんに兼かねさん、御苦労さま」

若者たちは出ていった。腰抜け医者だとか、ふるえてたぜ、などと云うのが聞え、二三間いくとばか笑いするのが聞えた。同時に竹造の顔が赤ぐろくなるのを、登は見た。去定はまったく無関

心に、十日ばかりしたらまた来ると云い、まもなくその家を出た。

みくみ町から下谷したやへまわり、根岸の寮で寝ている穀物問屋の隠居をみまつた。それから神田の商家、鍛冶橋かじばし御門の中の松平おき隠岐邸と、次つぎに八カ所回診したが、その途中、歩いているあいだは休みなしに、登に向かって話し続けた。

「人間ほど尊く美しく、清らかでたのもしいものはない」と去定は云つた、「だがまた人間ほど卑しく汚らわしく、愚鈍で邪悪で貪欲どんよくでいやらしいものもない」

あの娼家の主人たちは、女に稼がせて食っている。その善悪はともかく、現に女で食っているのだから、せめてそれだけの償いをしなければならぬ。だが事實は多く反対で、稼がせるだけは

稼がせるが、病気になつてもろくろく養生もさせず、特約して
いる町医と結託して、倒れるまで客を取らせ、いよいよ寝込んでし
まうと、薬はおろか食事も満足には与えない、いわば早く片のつ
くのを待つというような、無慚むざんなことを平気でする。そんな例は
ざらにはないだろうが、養生所へ逃げて来た三人の女たちがそう
だったし、現在もみくみ町で幾軒かそういう家がある。

「おれは売色を否定しはしない、人間に欲望がある限り、欲望を
満たす条件が生れるのはしぜんだ」と去定は云つた、「売色が悪
徳だとすれば料理茶屋も不必要だ、いや、料理割かつぼう烹そのものさ
え否定しなければならぬ、それはしぜんであるべき食法に反す
るし、作った美味で不必要に食欲を唆るからだ」

もちろん料理茶屋はますます繁昌するだろうし、売色という存在もふえてゆくに違いない。そのほか、人間の欲望を満たすための、好ましからぬ条件は多くなるばかりだろう。したがって、たとえそれがいま悪徳であるとしても、非難し譴責し、そして打ちこわす。毀そうとするのはむだなことだ。むしろその存在をいさましく認めて、それらの条件がよりよく、健康に改善されるように努力しなければならぬ。

「こんなことを云うのは、おれ自身が経験しているからだ」と去定は云った、「どんなふうにと説明することはないだろう、おれは盗みも知っている、売女ばいたに溺おぼれたこともあるし、師を裏切り、友を売ったこともある、おれは泥にまみれ、傷だらけの人間だ、

だから泥棒や売女や卑怯者ひきようものの気持がよくわかる」

そして急に舌打ちをした。

「ばかな」と去定は足踏みをした、「なにをいきまくんだ、今日はどうかしているぞ」

登は殆んどあつけにとられていた。

——盗み、裏切り、友を売った。

いったいどういうことだろう。現実になんな経験をしたのか、それとも観念的な話だろうか。いずれにしても、なぜ突然こんなことを云いだしたのだろう、登はそう思いながら、黙って去定に付いて歩いた。

四

その夜、——例によつておそい晩飯が済んでから、登は去定に呼ばれてその部屋へいった。去定は机の脇にある包みを取つて、登のほうへ差出し、長いあいだ済まなかつたと云つた。

「なんででしょうか」と登は訊きいた。

「いつか借りた筆記と図録だ」

登は頷うなずいた。それは彼が長崎へ遊学したときのもので、各科の病理や解剖、治療、調剤にわたる記録で、この養生所の見習医になつたとき、去定に求められて呈出したものであつた。

「必要なところを筆写させてもらった」と去定は云つた、「これ

は自身のためではなく、病人たちのために役立てるのだ、不服かもしれないが了解してくれ」

登は腋わきの下に汗のにじむのを感じた。それは、初めにその筆記図録を出せと云われたとき、彼は頑強に「これは私のものだ」と拒こぼんだ。特に本道ほんどう（内科）の部門には、彼なりにくふうした診断法や治療法があり、それによつて医界に名を挙げる事ができる、と信じていたからである。登は「内障眼そこひの治療法だけで天下の名医といわれた人さえあるではないか」とまで云つたものだ。「おれは今日、盗みもやったと云つたが」と去定は苦笑しながら云つた、「これも盗みの一つだろうな」

「どうぞおゆるし下さい」登は低頭した、「あのときは分別がな

かったのです、いま考えると恥ずかしくってたまりません、お願いですからもう仰しやらないで下さい」

「おれも今日の自分が恥ずかしい」去定は髯ひげをごしごし擦こすった、筋もとおらぬあなたたわ言を並べ、独り偉そうにいきり立ったことを思うとわれながらあさましくなる」

「先生は怒っていらしたのです」と登が云った、「あのおとよという娘の家で二人のならず者が暴言を吐いた、そのときがまんなすった怒りが、下谷へゆく途中から出はじめたのだと思います」

「それは少し違う、おれはあの二人には同情こそしたが、決して怒りは感じなかった」

「——同情ですって」

「数年まえから、ああいう若いやくざがふえるばかりだ」と云つて、去定は太息をついた、「その原因の一つは幕府の儉約令にある、無用の翫物がんぶつと贅ぜいたく沢を禁じたのはいいが、その取締りが度を越したために、商取引が停滞し、倒産する者や職を失う者が多数に出た、また大きな埋立て工事や、川堀の普請の中止などで、稼ぎ場をなくした者も少くない、——それでも年配の家族持ちや、才覚のある者ならなんとか生きるみちを掴つかむだろうが、まだ気持のかたまりらない若者などはぐれてしまい易い、生れつきやくざな性分を持っている者はべつとして、ふつうの人間なら誰しもまっとうに生きたいだろう、やくざ、ならず者などといわれ、好んで人に嫌われるような人間などいる筈はない」

おれは今日の二人に限らず、街をうろついている若者たちを見ると、可哀そうでたまらない気持になる、と去定は云った。

「娼家の主人たちも同様だ、女たちを扱う無情で冷酷なやりかたを見ると、捉^{つか}まえて逆吊^{さかづ}りにでもしてやりたいと思う、初めのうちはいつもそうだったし、いまでもしばしばそういう怒りにおそわれるが、よく注意してみると、かれらも貪欲だけでやっているとは限らない、やはり貧しさという点では、雇っている女たちに劣らないような例が少なくないことがわかる」去定はそこでちよつと口をつぐみ、こんどは自分を責めるような調子で続けた、

「——世間からはみだし、世間から疎^{うと}まれ嫌われ、憎まれたり軽侮されたりする者たちは、むしろ正直で気の弱い、善良ではある

が才知に欠けた人間が多い、これらがせつば詰まった状態にぶつつかると、自滅するか、是非の判断を失つてひどいことをする、かれらにはつねにせつば詰まる条件が付いてまわるし、その多くは自滅してしまうけれども、やけになつて非道なことをする人間は、才知に欠けているだけにそのやりかたもけたはず桁外れになりがちだ、それは保本もずいぶん見て来たことだろう」

この世から背徳や罪悪を無くすることはできないかもしれない。しかし、それらの大部分が貧困と無知からきているとすれば、少なくとも貧困と無知を克服するような努力がはらわれなければならぬ筈だ。

「そんなことは徒労だというだろう、おれ自身、これまでやって

来たことを思い返してみると、殆んど徒労に終わっているものが多い」と去定は云った、「世の中は絶えず動いている、農、工、商、学問、すべてが休みなく、前へ前へと進んでいる、それについてゆけない者のことなど構ってはいられない、——だが、ついてゆけない者はいるのだし、かれらも人間なのだ、いま富み栄えていく者よりも、貧困と無知のために苦しんでいる者たちのほうにこそ、おれは却^{かえ}つて人間のもつともらしさを感じ、未来の希望が持てるように思えるのだ」

人間のすることにはいろいろな面がある。暇に見えて効果のある仕事もあり、徒労のようにみえながら、それを持続し積み重ねることによって効果のあらわれる仕事もある。おれの考えること、

して来たことは徒労かもしれないが、おれは自分の一生を徒労にうちこんでもいいと信じている。そこまで云つてきて、急に去定は乱暴に首を振った。

「おれはなにを云おうとしているんだ、ばかばかしい」そしてまた髯をごしごし擦った、「今日はよつほどどうかしている、保本を呼んだのはこんな話をするためじゃない、ほかに云いたいことがあつたからだ」

登は去定を見た。

「天野の娘のことだ」と去定は眼を脇へそらしながら云つた、

「わかっているだろう」

「はい」と登は答えた。

「おれは詳しい事情は知らない、源伯は話そうとしたが、おれは事情は聞かなかつた、むろんおよその察しはつくが」去定は言葉を続けるまえにちよつと休んだ、「要点を云えば、天野は妹娘を保本に貰つてくれというのだ、年は十八で、名は、なんとかいったな」

「まさをとிட்டた筈です」

「当人を知つてゐるのだな」

「顔かたちを覚えてゐるくらいです」

「姉娘のほうは義絶になつたままだという、保本が妹娘を貰つてくれれば諸事まるくおさまる、これはおまえの両親も望んでゐるそうだ、もしそうする気があるのなら、いちどこうじまち麴町の家へい

つて来るがいいだろう」

「まだ修業ちゆうですから」と登は答えた、「結婚のことなど考えたくありません」

去定は登を見た、「まだ姉娘のことにこだわっているのか」

「いや、と申せば嘘になるでしょうが」と登は云った、「いまの私には修業のほうが大事であり、また張合いがありますから、当分のうちはそういうことを考えたくないのです」

「では約束だけでもしておいたらどうだ」

登の顔がするどく歪ゆがんだ。

「せっかくですが」と彼は顔をそむけながら云った、「私にはそういう約束はできません」

去定はじつと登の顔をみつめていたが、やがて机のほうへ向き直り、低い咳せきをして云った。

「話はそれだけだ」

登は辞儀をし、記録の包みを持って立ちあがった。

五

自分の部屋に帰って、記録の包みを戸納とだなへしまってから、登は森半太夫の部屋を訪ねた。半太夫は机のそばに行燈をひきよせて、日記を書いているところだった。入所患者に関する毎日の記事を書くのが、半太夫に任された事務の一つだったのである。

「いま終るところだ」と半太夫が云った、「そこに円座えんざがある、ちよつと待つていてくれ」

登は脇にある円座を取つて坐つた。

半太夫を訪ねたのは、去定のことを知りたかつたからである。盗みをした、ということとはともかく、師を裏切つたとか、友を売つた、などという言葉には意味がありそうだし、大名諸侯や富豪から、礼をつくして迎えられるほどの腕を持っていて、いまだに妻も娶めとらず、養生所で独り不自由なくらしをしていることにも、なにか仔細しさいがありそうに思えた。半太夫は古参でもあり、去定とはもつとも近いので、その経歴なども知つていようと考えたのだが、訊いてみると殆んどなにもしらなかつた。

「先生は決して自分のことは話さない方だから」と半太夫は云つた、「私の聞いたところでは、馬場穀里こくりの門下で、鍛冶橋の宇田川榕庵ようあんは先生の後輩だということだ」

「馬場というと、洋学の、——」と登は意外そうに反問した、「そして宇田川榕庵と同門の先輩に当るって」

「先生からじかに聞いたのではないから、どこまで真実かはわからないが、馬場氏がもつとも信愛していたのは新出先生だったそうだ」と半太夫は云つた、「それで馬場氏は先生を自分の後継者にするつもりでいたところが、先生はそれを嫌って門下をはなれ、長崎へ行って蘭らんぽう方の医学をまなばれたということだ」

登はどきんとした。いつか臍すいぞう臓の癌腫がんしゅで死んだ患者があつ

たとき、去定が蘭語ですらすらと病状を云った。登はそれを、自分の筆記で覚えたのだらう、と思つたのであるが、長崎へ遊学したことがあるという、自分などより新らしい知識を持っているかもしれない。語学の秀才だったとすれば、こつちにいっても蘭語の医書が手にはいるし、実地に病人の治療をして来たのだから、自分の筆記などから覚えるようなことはない筈である。

——では筆記や図録を写したのはなぜだらう。

おそらく、と登は思つた。おそらくそれは、どんなものからもまなぶ、という謙遜けんそんな気持なのだらう。登は心の中で激しく、自分の軽薄さを罵ののつた。

「どうしてそんなことを訊くんだ」と半太夫が云つた、「先生に

なにかあつたのか」

登は今日あつたことを話した。

「わからないな」と半太夫は云つた、「師を裏切つたというのは、馬場氏の門下を去つたことかもしれない、たぶん、語学の後継者にとつて師の望みにそむいたことをさすのだろうが、盗みとか友を売つたなどということは、現実的な意味ではないのじゃあないか」

「そうも思つたのだが」と登は頷いて云つた、「ひどくしんけんに、告白するというような口ぶりだったのでね、しかし、たぶん言葉どおりではないだろうな」

「自分には特にきびしい人だからね」

登はまもなく立ちあがった。

次にみくみ町へいったのは、まえの日から七日めに当る、雨もよいの午後のことであつた。梅雨でもかえつたように、湿つぽくむしむしする日で、六カ所回診するうち、三度めにいやなことがあつた。それは日本橋しろがねちよう白銀町の、和泉屋徳兵衛いずみやという質両替商で、四十一歳になる妻女が中風になり、半年ほどまえから診察にかよつていたのだが、去定は例のように高額な薬札を取つてい、それを徳兵衛が不当だと思つていたらしい。診察をし薬の調合を変えて与えると、側そばで眺めていた徳兵衛が茶をすすめながら皮肉な顔で去定に話しかけた。

「つかぬことをうかがいますが、医は生死のことにあずからず、

ということがあるそうでございますな」

「あるようだな」と去定は答えた。

「するとなんですか」と徳兵衛はそらとぼけた声で云った、
「治る病人は治る、死ぬ病人は死ぬ、医者を知ったことではない、
というわけでございますかな」

「そういう意味もあるだろうね」

「するとその、^{やぶ}藪医者も名医も差別はない、高価な薬も売薬も同じことだ、というわけになるのですよかな」そこで徳兵衛はわざとらしく付け加えた、「もちろん新出先生のような御高名な方はべつとしてですが」

「私をべつにすることははない」と去定は答えた、「おまえさんの

云うとおり、医者にも薬にもたいした差別はないというのが事実だ、名医などという評判を聞いて高い薬札を払ったり、効能も知れぬ薬を買いあさったりするのは、泥棒に追い銭をやるよりばかげたことだ——なにかそのほかに訊きたいことがありますか」

「これはどうも、御機嫌を損じたようでごさいますな」

「いやなかなか」と去定は立ちあがりながら笑った、「このくらのことで肚はらを立てるようでは、金持のたいこ医者が勤まるものではない、その懸念は御無用」

外へ出るとすぐに、去定は「吝嗇漢りんしよくかん」と云つて唾を吐いた。

それから三軒廻つたのだが、機嫌の直るようすはなかつた。登もこれまで外診の供をしていて、去定がそんなことを云われるのを

見た例はなかった。町家はいうまでもなく、大名諸侯でさえ、相当以上の礼をつくして迎えるのがつねであった。

——ひどいやつがあつたものだ。

徳兵衛の皮肉な、そらとぼけた口調や、色いろつや艶つやの悪い顔にうかべた卑しい表情などを思い返すと、登もまた睡を吐きたいような、いやな気持になるのであつた。

六軒めの回診が終つて出たとき、去定は空を見あげて、「さてつぶやとつぶや呟つぶやき、そのまま暫く立停つていた。竹造は背負つた薬籠をゆりあげながら、うかがうように登を見た。登は眼で、黙つていろといろいう合図をした。

「まだ帰るには早いな」と去定はわれに返つたように云つた、

「よし、みくみ町へ廻つてやろう」

そして元氣よく歩きだした。

まるで軀の中から不機嫌を叩き出そうとでもするように、力のこもつたおおまた大股で、御成道おなりみちを横切ると、松下町から武家屋敷のあいだをぬけ、細くて急な坂を登つてみくみ町まで、ぐんぐんと休みなしに歩き続けた。薬籠を背負っている竹造は汗だらけになり、登に向かつてそつと苦情を云つた。

「あのけちんぼの仇かたきを、こちとらで討たれるようなもんだ、こんなつまらねえ話はありませんぜ」

登は黙つて振向いた。竹造はぐしゃぐしゃになつた手拭で額を拭き、それを両手で絞つてみせた。手拭はいま水からあげでもし

たように、信じ難いほどの量の汗が絞り出された。登は苦笑して、「よせ」と云いかげながら、ふと、すれちがつてゆく男のほうを見た。それは娼家街のほうから来たのだが、すれちがうときに変な眼でこちらを見た。一種のするどさを帯びたいやな眼つきだったので、登が振返ると、その男もこちらを振返って見てい、だがすぐに顔をそむけると、小走りに横丁へ曲つていった。

「いつかのやつですぜ」と竹造が吃りながら云つた。

六

「いつかのやつつて」

「このまえ本郷の通りで、わぎと先生にぶつつかつて文句をつけたやつです」

「そうかな、私は気がつかなかったが」

「あつしはあの面で覚えてましたよ」と竹造は云った、「野郎こそこそ逃げていったじゃありませんか」

「そうらしいな」と登が云った。

去定はその日、十七軒ある娼家をぜんぶ診てまわった。中には拒む家もあったが、去定は相手の云うことなど聞きもせず、強引にあがつて女たちを呼びだし、ちよつとでも疑わしい者は遠慮なく診察をし、病気に冒されていれば投薬したうえ、症状に応じてその雇い主たちに注意を与えた。

「この女は十日休ませろ」とか、「この次おれが診に来るまで客を取らせるな」とか、ごくひどい者は「生家へ帰らせる」と命じたりした。たいていはうわべだけにしろ、はいはいとすなおに聞いた。診察も治療も只でしてくるのだから、むしろ感謝するのが当然であろう。けれども中には反抗する者もあつた。

「うちではこの女一人が稼ぐんですよ」とやり返す女主人がいた、「こつちの女はお茶ばかりひいて、三日に一人の客も取れやしない、肝心の稼ぎ手に十五日も休まれたら、それこそ口が干あがつちやいますからね、それとも十五日間の食い扶持ぶちを下さろうつていうんですか」

「十五日休ませろ」と去定は云つた、「さもなければ、口が干あ

がるぐらいでは済まないことになるぞ」

その女主人は顔をひきつらせ、睨み殺そうとでもいうような眼つきで、去定をねめつけた。

おとよという少女のいた家では、「もうあの子はいない」と云った。養生所へ伴れてゆかれるかもしれないということばかり心配していたが、三日まえの朝早く、誰も気がつかないうちに逃げだしてしまった。ゆく先のあてもないのだから捜しようもない、ということであった。真偽はわからない、事實はよそへ売ったのではないか、と登は思った。このまえのときおとよは、女主人のことを「かあさん」と呼びかけて、慌てて「おばさん」と呼び直した。親類の子を預かっているというのも嘘だったらしいから、

いま話していることも真実ではないだろう、そう思つて去定を見たが、去定はべつに詮せん索さくもせず、黙つて聞いていて、やがて立ちあがつた。

十七軒めを済まして出たとき、去定が口の中で「医者にかかつてくれればいいが」と呟くのが聞えた。外は黄昏たそがれかかつていて、早くも酔つているらしい客が、あちらこちらに一人二人と、娼家の軒先で女たちと話したり、ふざけた声で笑つたりしていた。そして去定たちが門へかかろうとすると、その前を塞ふさぐように、二人の男があらわれて道の上に立つた。どちらも若く、一人は双もろ肌だぬぎ、一人は禪ふんに白としい晒さら木綿しの腹巻だけで、その裸の男のほうだが去定に呼びかけた。妙にへりくだつた、あいそのいい口ぶり

で、眼だけに凄^{すこ}みをきかせながら、今後はこの土地へ近づかないほうがいい、という意味のことを云った。

去定は若者をじつとみつめていて、それからごく穏やかに訊いた、「どうして、おれが来てはいけないのだ」

「土地がさびれるんだそうですよ」と若者は答えた、「おまえさんは初めに町方を伴れておいでなすった、それは一度つきりだつたそうだが、なにしろ養生所はお上^{かみ}の息がかかつてるし、おまえさんはそのこの先生だ、しぜんおまえさんのような人が出入りをすると、客がこわがって寄りつかなくなる」

去定は遮^{さへぎ}つて云った、「そんな持つて廻つたことを云うな、おまえは誰かに頼まれて来たのだろう、頼んだのは誰だ」

「このしませんたいですよ」

「正直に云え」と去定はたたみかけて云った、「おれは二年あまりここへかよっている、しようばいの邪魔になるなら、もうとつくに文句が出ている筈だ、誰に頼まれたか正直に云え、誰だ」

「威勢のいいじじいだな、ええ」若者は伴れのほうへ振向いた、「せつかくためを思つて云つてやるのに、これじゃあ穏やかにやあ済まねえらしいぜ」

「あまくみてえるんだ」肌ぬぎの男は手をあげて叫んだ、「おい、みんな来てくれ」

登は振返つた。するとうしろのほうに三人若い者がいて、こつちへ走つて来た。二人はこのまえ、おとよのことでやりあつた相

手であり、他の一人は来るときにすれちがった、竹造に云わせれば「本郷一丁目で突き当った」男だということを登は認めた。

「保本、——」と去定が云った、「竹造といっしよにさがつていろ、手出しはならんぞ」

「それはいけません、先生」

「いや構うな」と去定は登を遮った、「おれは大丈夫だからさがつていろ、ええ、さがつていろというんだ」

登と竹造は脇へさがった。登は足ががくがくし、睡がのみこめなくなつた。竹造を見ると、怒りのためだろう、顔が赤くふくれていたが、不安そうなようすはみえなかつた。

「やいじじい」と裸の男が云っていた、「年を考げえて引込んだ

らどうだ、いまのうちなら見逃がしてやるが、へたに意地を張ると一生片輪者になるぜ」

「きさまこういう地口を知っているか」と去定は云った、「医者けんかと喧嘩をして逃げるやつが云うんだ、あの医者の手にかかる命が危ない、——きさまたちもよく考えるほうがいい、おれは命は取らないが、それでも手足の二本や三本、へし折るぐらいのことはやりかねないぞ」

裸の男、たぶんこの中のあにき分だろうか、ふんとせせら笑いをしながら、みくびつたようすで去定のほうへ近よつた。

「じじい」と彼は問いかけた、「てめえ本当にやる気なのか」

「よしたほうがいい」と去定が云つた、「断わっておくがよした

ほうがいいぞ」

男は突然、去定にとびかかった。

登はあつけにとられ、口をあいたまま茫然と立っていた。裸の男がとびかかるのははつきり見たが、あとは六人の軀が纏れあい、とびちがうので、誰が誰とも見分けがつかなかった。そのあいまに、骨の折れるぶきみな音や、相打つ肉、拳の音などと共に、男たちの怒号と悲鳴が聞え、だが、呼吸にして十五六ほどの僅かな時が経つと、男たちの四人は地面にのびてしまい、去定が一人を組伏せていた。のびている男たちは苦痛の呻きうめをもらし、一人は泣きながら、右の足をつかんで身もだえをしていた。

「さあ云え」と去定は組伏せた男——それはあにき分とみえる裸

の若者だったが、その男の首を片手で責めながら云った、「誰に頼まれてした、誰だ、云え、云わぬとこのまま絞めおとすぞ」

男はぜいぜいと喉のどを鳴らし、首を左右に振りながら云った、

「ごあんさまです」

「誰だと、はつきり云え」

「御徒町おかちまちの」と男は喘あえぎながら云った、「——井田の若先生で

す」

七

井田五庵ごあん、なにを云うか、と登は思った。井田五庵は養生所の

医員である、父の玄丹げんたんとともに、御徒町で町医を開業しているが、親子二人とも、かよいで養生所の診療に当たっている。ばかな云いぬけをするやつだと登は思ったが、去定は手を放して立ちあがった。

「それに相違ないだろうな」

「ほかにもいます」男は起き直つて、苦しそうに喉のどを押えながら云つた、「この湯島の荒巻つていう人と、天神下の先生などにもまえから頼まれていました」

「それも医者か」

男は頷いて咳せきをした、「二人ともお医者です、こんどは井田先生にせつつかれてやったんですが、井田先生はともかく、荒巻さ

んと天神下の石庵せきあんさんは、このしまでくらしを立ててるようなもんですから、へえ」

「わかった、もうよせ」と去定が遮った、「きさま立って、その辺から板切れを二三枚捜して来い」

幅と長さはこのくらい、と去定は手で寸法を示し、男はよろよろ立ちあがった。

去定はのびている四人を診てまわった。二人は腕が折れてい、一人は気絶、一人は脛すねの骨に罅ひびが入っていた。そして四人とも、眼のまわりや頬骨のあたりに痣あざができていたり、裂けた唇から血が流れていたり、瘤こぶだらけだったりした。去定はまず気絶した男に活をいれ、竹造に藁籠をあけさせて、すばやくそれぞれに手当

をしてやった。——これだけの騒ぎにもかかわらず、娼家はみな表を閉めているし、あたりには人の姿もなかった。むろん、かかりあいになるのを怖おそれているのだろう。去定はすばやく手当を済ませ、裸の男が板切れを持って来ると、登に晒さら木綿を裂かせて、二人の折れた腕そえぎに副木を当ててやった。

「少しやりすぎたようだな、うん」手当をしながら、去定はしきりに独ひとり言を云った、「もう少しかげんすればよかった、うん、こいつはひどい、こんな乱暴はよくない、医者ともある者がこういうことをしてはいけない」

登は竹造を見た。

「初めてじゃありませんよ」と竹造は吃りながら囁いた、「こい

つらの知らないほうがふしぎなくらいです、まえに幾度もありま
したよ」

登は嘆息しながら首を振った。

「よし、伴れてゆけ」去定は立ちあがって、裸の男に云った、

「これは仮の手当だ、井田のところへ伴れていってやり直しても
らえ」

「しかし」とその男は渋った、「こういうことになった以上、ま
さか井田先生のところへは、どうも」

「いやなら養生所へ来い」と去定は云った、「傷の手当だけでは
なく、仕事が欲しければ仕事の相談もしよう、いつまでやくぎで
いられるものじゃあないぞ」

「へえ」と男は頭を搔かいた。

「少し度が過ぎたようだ」と去定がまた云った、「勘弁してくれ」
そして登に振向いて、歩きだした。

「かなしいものだ」たそがれ黄昏の街を歩いてゆきながら、去定は登に云った、「あの医者どもは娼家と結託して、女たちを不当にしぼる、ろくな薬もやらず、治療らしい治療もせず、ごまかしで高い薬礼をしぼり取っている、おれはまえから知っていた、正当な治療もせずに、ああいう哀れな女たちをしぼるのは、強盗殺人にも劣らない非道なやつだ、今日はその怒りが抑えきれなくなったのだ、——がこういうことはむずかしい」

「なにがですか」と登は挑みかかるように反問した、「井田親子

は養生所の医員ではありませんか、養生所医員という看板で町医を稼ぎながら、あんなやくざ者を使つてまで」

去定は手をあげて制止した、「井田のことはべつだ、井田親子のことはやがて始末をつける、おれはほかの二人、荒巻とか石庵とかいう者のことを考えたのだ」

「その二人にしろ、非道な点に変わりはないでしょう」

「だが、かれらもまた、人間だ」くたびれはてたような口ぶりで、去定は云つた、「かなしい哉、^{かな}かれらも人間だということ認めなければならぬ、おそらく家族もあることだろう、医者としての才能がないとわかつて、ほかに生きる手段がなければどうするか、——妻子をやしないその日のくらしを立てるためには、た

とえ非道とわかつて、ならい覺えた仕事にとりついているよりしようがない」

「しかしそれは理屈に合っていません」

「おれにはわからない、まるでわからない」と去定は首を振った、
「おれには理屈などはどうでもいい、かれも人間、これも人間、
かれも生きなければならぬしこれも生きる権利がある、ただ、
どこかできなが間違っている、どこできなが間違っているのか、
——ふん、おれの頭はすっかり老髻おいぼれたらしいぞ」

登は喉でくすつとといった。すっかり老耄ろうぼうれたという言葉が、

(意味は違うにせよ) さつき六人のならず者を投げとばした、豪
快な姿を思いださせて、ふと可笑おかしくなったのである。去定が不

審そんな眼で登を見た。

「いや、なんでもありません」と登は首を振りながら云った、
「なんでもありません」

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第十一巻 赤ひげ診療譚・五瓣の椿」新
潮社

1981（昭和56）年10月25日発行

初出：「オール読物」

1958（昭和33）年9月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤ひげ診療譚

徒労に賭ける

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 山本周五郎
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>